

倭姫命御陵

現代御師再考塾

秋田耕司

はじめに

本年、令和5年(2023年)は、神代の昔、天照大御神を伊勢の現在地に誘ったとされる倭姫命やまとひめののみことを祭神とする内宮別宮の倭姫宮やまとひめのみやが鎮座してから100周年にあたり、奉祝行事が催行され、計画されているが、改めて、倭姫命について史料を収集して整理してみる。



倭姫命

倭姫命世記(後述)や紀記によると、古来、宮中では、天照大御神として三種神器である、八咫瓊勾玉やまのつらぎかにかのまがたま、八咫鏡やたのかがみ、天叢雲劍あめのむらくものつらぎ(草薙の劍くさなぎのつらぎとも)を祀っていた(同床共殿)が、第10代崇神天皇(在位BC97〜30年)の時に国が乱れ、それを鎮めることが出来なかつたため、神威を畏れ、共に住むこと安からずとして、崇神天皇6年(BC92年)に劍と鏡を宮中から大和国笠縫邑かさぬいむらに移して、神が降臨する特殊な場(神籬かみかき)を創り、天皇の代理として皇女豊鍬入姫命とよくわいひめのみことが天照大御神と劍、鏡を奉斎した。この役目を御杖代みつえしろというが、これが天照大御神流転の始まりでもあり、斎宮いひみやの始まりでもある。

その33年後、第11代垂仁天皇(在位BC29〜AD70年)の第4皇女倭姫命やまとひめののみこと(日本書紀では

倭姫命)、古事記では倭比売命)、生没年不詳)がこれを受け継ぎ、倭姫命、菟田うたの篠幡ささはたに祀り、更に還りて近江国に入りて、東の美濃を廻りて、伊勢国に至る。」とあるように天照大御神が鎮まる聖地を求め、近畿・東海地方等、各地を遷座(元伊勢)して、5年間の末、垂仁天皇25年(BC4年、宮中を出て88年後)、現在地(伊勢市宇治館町)に鎮座したと記されている。仮に、倭姫命が10歳の時に豊鍬入姫命から継承したとすると単純計算では、この時、倭姫命は65歳くらいだったか？

そして、倭姫命は、第12代景行天皇(在位西暦AD71〜130年)の20年(AD91年)の時に引退する。計算上の、この時の年齢は160歳である。(以後、ADは表記しない。)

倭姫命は引退指定谷も関わらず、景行天皇の皇子で倭姫命の甥にあたる日本武尊やまとたけるのみことが景行天皇28年(99年)、東夷討伐に向かう時に東国は落ち

着かず、それを鎮めるために尊が伊勢神宮に戦勝を祈願した時、(伊勢において、)倭姫命から、今は熱田神宮に草薙剣として祀られている天叢雲剣を与えた、といわれる。その時の、倭姫命の年齢は168歳となる。

その後、皇太神宮儀式帳「には、日本武尊に草薙剣を授けていた後の景行天皇40年(111年、188歳)の時、倭姫内親王は朝廷に還り参り上る」とあることより、帰京し、そのまま薨去した可能性はある。

一方、平安初期の 止由気神宮儀式帳「ゆけじんぐうぎしき ちようによれば、第21代雄略天皇22年(478年、内宮鎮座から482年後に丹波国の比沼真奈井原まないはらから伊勢山田原に、外宮」が遷座したと伝わる。倭姫命はこれを見届けて、翌年の雄略天皇23年(479年)春2月、倭姫命が 自ら尾上お山峯に退き、石隠れ坐した」、つまり、伊勢の尾上山峰にて薨去したと記していて、前述と違いがある。この場合の享年は548歳という勘定になる。

帳」と共に、総称して 延暦儀式帳」という。平安時代、延暦23年(804年)に成立し、現存する伊勢神宮関係の記録としては最古のものといわれている。

倭姫命御陵

そのような経緯があるため、倭姫命がどこで薨去したか、について議論されるのは当然の成り行きであろう。この問いに関して、外宮権禰宜で神宮教院教導職だった松木時彦(生没安政5〜昭和9年1858〜1934年)著、正統神都百物語続編「昭和7年発行」85、尾部御陵「によると、倭姫命薨去の地には、前述にあったように、古くから2説あるという。

一つは、皇太神宮儀式帳「よる、日本武尊に草薙剣を授けていた後の景行天皇40年(111年、188歳)の時、倭姫内親王は朝廷に還り参り上る」とあることから、景行天皇20年(AD91年、160歳)の時に帰

記述している西暦年号や歳は言い伝えを単純計算しているだけで、神代の時代の、根拠のない話である。同様史料と比較すると計算誤差は±1年程度ある。

倭姫命世記「やまとひめのみことせいき

天地の始まりから、天照大御神が天皇と同床共殿していた時代、崇神天皇の代から始まる皇大神宮の各地での遷座(元伊勢)と現在地への遷座を経て、雄略天皇の代の外宮鎮座に至る倭姫命が関わりを記している。同書は神護景雲2年(768年)、禰宜五月麻呂の撰と伝わっているが、実際は鎌倉時代(1185〜1333年)の中期において、外宮 二禰宜(西川原長官)度会行忠(生没 嘉禎2〜嘉元3年1236〜1306年)が編纂したと考えられている。伊勢神道の経典である 神道五部書「の一つである。

止由気宮儀式帳「ゆけじんぐうぎしきちよう

豊受大神宮(外宮)に関する儀式書であり、皇太神宮(内宮)に関する儀式書である 皇太神宮儀式

京して引退し、8年後の景行天皇28年(99年)に來勢して日本武尊に草薙の剣を手渡し、12年後の景行天皇40年(111年、180歳)の時、再び帰京し、その後、京の地で薨去されたというような説(帰京説)。

もう一つは、倭姫命世記「の記述通りで、神都伊勢の尾上峰に隠れた(薨去)とする説。(尾上峰説)である。

帰京説は、内宮の識者や国の学者が提唱していたが、特に、外宮神職で国学者でもあった御巫みかみ清直(生没文化9〜明治27年1812〜1894年)もそれに賛同して、彼の著 大神宮本紀「帰正抄」や 度会県下陵墓考「で帰京説を主張している。しかし、それが真実ならば、倭姫命世記」の記述にある、景行天皇の時に内宮において倭姫命が日本武尊に草薙の神剣を授受したという記述をどうみるのか、という問いに、内宮禰宜で国学者であった、益谷末寿(生没 明和元〜文政11年1764〜1828年)は、神剣を授受するために倭

姫命がわざわざ大和から伊勢の地に参向したのだと論じた。

一方、尾上峰説は外宮派の学者が主張した。帰京説を唱えていた御巫清直も遂に自説を翻し、尾部御陵紀原」を著作して正反対な考証を提唱し、遂に論争に決着したといわれる。

しかし、薨去の地は「伊勢」に決まったとは言え、尾上峰は「どこか」ということになる。

「尾上山」の所在地を求めて江戸時代から多くの人々が探求してきたが諸説あった。

尾上おへ山」は、尾部・小部・玄扈げんこ（土地の名？）とも言い、ややこしい。また隠岡、隠丘とも言った所であり、南北方向は古市街道から北に御幸道路まで、東西方向は西の隠岡遺跡を含み、一誉坊墓地から東の地獄谷まで、つまり今の尾上町の北、倭町周辺の丘陵地帯、つまり倭町の辺りをいうと思われる。

尾上の名については一説に、その地は南面の方に山が

この辺りの地主は山の木を切らずに鳥居などを建てるなどしているようだ。（常明寺岩窟か？）

○経々峰（妙見堂の東南の山）の頂上

○八幡山（妙見堂の西、虎尾山のさらに西の山）、

○隠山（尾上山の別称で常明寺山か？）

○妙見町人家の東裏に一つの社地の垣根があるが、

それも石隠いしかくれの地という。

しかし、最も有力なのが倭町の南端にある元常明寺の岩窟だと言われている。伊勢参宮名所図会 第4巻」が掲載している常明寺境内の図会には、阿か井」のそばに「岩窟」がある。参考にされたい。

伊勢参宮名所図会」

寛政9年（1797年）に京都・大阪の版元から刊行された本編5巻6冊、附録1巻2冊、合計8冊からなる伊勢参宮の案内書。秋里籬島・秦 石田の著述、萩 関月・西村中和の作画と考えられている。

続いていて、その山の「尾」にあたる土地だから、そのよ
うな名がついたと言われ（伊斎旧蹟書）、一説では倭姫
命が隠れた石室が玄扈で、玄扈が尾部と訓読みするの
で、そう称されたとも言う（神境紀談、毎事問）。ある
いは尾上山は御贄川おんがわに対してそう呼ばれたのかも
知れない。「勢陽俚談」にも小部御陵おこりょう、御贄御陵
おこりょうが交互に用いられている。

その周辺各所に倭姫命陵墓と称される諸説がある。

○赤門寺）正寿院（岩淵町字前田）境内の石櫛

（「勢陽五鈴遺響」、神都名勝誌」による）

○南丘の上にある妙見町の正住院の石櫛

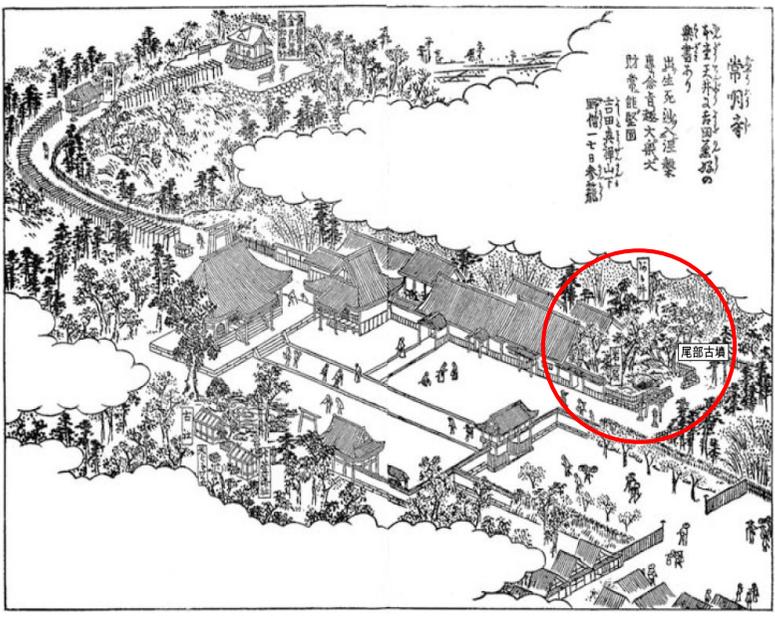
（同名寺は岡本町字向山 明治元年廃寺がある
が位置が違う。寿巖院入門寺か？）

○小田橋の東南方向にある天福寺の幽林。

（天福寺は常明寺の別称ではあるが、方向が違
う。これも寿巖院入門寺か？）

○天福寺山の頂きに巖上石つみの宮

伊勢参宮名所図会 常明寺」の「阿か井」と「岩窟」



伊勢參宮名所図会」の解説をそのまま意識する。

尾上山おやま

古くは隠岡かくれのおかという。倭姫命薨去の地であるので万葉集や代々の撰書に詠まれることが多かった。寛文中(1661〜73年)に、尾上社として倭姫命の社が再建されたが破却され、今は誰が建てたか分からないが社がある。隠岡は、昔より寛文の頃までは墓地だった。今は、墓地は山の東に移された(現在の倭町共同墓地か)。

罪を犯す者がいれば、この山に引出して、罵り、辱めて追放し、あるいは谷に投げ落としたという。今はこの場所を「地獄谷」という。しかし、これは古い時代の話であり、慶安・寛文(1648〜73年)の近頃までは、この山の「こめ野ヶ池」という所は死刑場であったが、これもまた他郷に移され、その他、山田市中に隣接した多くの寺院や外宮境内で住んでいた人家も代替地を与えられて移動した。また、地獄谷の名前は、

地は尾上陵の方角に相応して古くから、尾上寺おと、あるいは泉寺、または天福寺などとも言われている。尾部坂にあるから尾上寺という。あか井あかの清水があつたことから「泉寺」の名もある。その後、廃寺となつたが、天福年中(1233〜4年)に再興され、「天福寺」といった。今は檜垣家常明つねあきらが再建したので常明寺といつている。「尾部坂」は、今の倭町の中

阿か井

中央にある長い峰坂を言うのかも知れない?)
常明寺庫裡の東の、竹林の中にある。この辺りの地名を全てあか井という。このことから泉寺という名がある。

岩窟

これを倭姫命の岩隠いわかくれの窟いわという。この寺の山門やまのの西端にしにあつたといわれる。また、妙見町人家の東裏に一つの社地の垣根があるが、それも石隠いわかくれの地という。あるいは、妙見町正住院内の石窟ともいわれ

昔、十石を寄付されたことがあつた寺があつたことから、十石谷とも言われたという説もある。

隠山かくれやま

妙見町と尾部坂との間の北にある山をいう。古記には、貞觀年中(859〜77年、平安時代)、妙見星の像を尾上陵おのみさきより西の小田岡崎の宮(妙見堂)に据えて奉つたといふことなので、「隠山」は妙見堂より東にあるはずである。世紀には、雄略天皇23年(479年)の春2月、倭姫命が尾上山の峰で退き、石隠れたことから、尾上山を隠れの山という。

常明寺

高日山法樂院という。間の山より北にあつた。当所(伊勢)第三の大事である。本尊は薬師如来、天台宗(もと真言宗であつたが、寛永年中(1624〜44年)天台宗に改宗している)で、額は後陽成ごようせい院のご宸翰しんぱんである。本堂や山門は雄大で、おごそかであつた。聖徳太子の建立だとも言われている。この

ている。また、天福寺山の頂きに巖上石積みの宮がある。この辺りの地主は山の木を切らず、鳥居を立てていることもあるので、それらを定めることはできない。

尾部社おのべ

(内宮に向かつて)(古市)街道より左(北)、妙見堂の東にあつた。祭神ははつきりしないが、倭姫命の可能性が高い。神祇本源によると、泉寺の西にあつたというが泉寺が廃寺になつて久しいのでわからない。ある説によると泉寺は常明寺の一名で、つまり、倭姫命の石隠れの地であるので、小さな祠ほらがあり、それを尾部社といつた(倭姫命の祠)。

尾上山」の条、参照のこと。

隠池かくれいけ

尾部坂より南の続きの上方にあり、俗に、不動池という。これは古くから「隠池」と言っているが確証はない。この池の岸に巨石があつた。水底には弘法大師が

彫刻したという不動尊がある。干ばつの時に、この不動尊が現れれば雨が降るといふ。(現在の中之町公園の池か？隠山との繋がりはない？)

神萱落社かんかおとしのやしろ

常明寺の西にあり、神祇本源じんぎほんげんには、尾上寺の前(北)にあつたという。祭礼は正月8日と12月10日の両日である。外宮の末社であるため、度会神主や神樂衆が勤めた。神官が馬に乗って参向した。その様子は様々だが省略する。また、男女陰形の餅を蒔いた(子授け餅まき神事)。世俗では、子がない者がそれを拾うと子が得られるといわれた。行事の終わりには住職が本堂にて読経した。神職は始終、応対しないで座っているだけで鼓吹こすい(意見や思想を盛んに主張し、相手に吹きむこと)した。(外宮の禰宜だった度会氏が子孫繁栄を願ひ祀つた神社で、祭神は大物主命・宇迦魂神・三輪大神・倭姫命である。)

その他の常明寺及び尾部御陵に関する史料を時系列的に羅列してみる。

継体朝(507～531年)、外宮神主度会二門の氏寺として常明寺が草創された。

長徳3年(997年)の類聚神祇本源るいこくしんぎほんげんには、外宮田(山田)社33前の中に、尾上社は泉寺の西に在り、神落萱社は尾上寺の前ありとある

永保2年(1082年)の書写奥書のある高庫藏等秘抄たかくらざうひみつにはすでに尾部の御陵の記事が見られる

平安時代(～1185年)末期の光明寺所蔵文書には、常明寺の寺名が見える。隠岡遺跡は弥生時代の遺跡でもあるが、その頃には、尾上長おのえのながみと称された外宮禰宜、度会康平、彦晴、貞雄などの禰宜層の居住地であったとも考えられているので、常明寺の敷地は隠岡遺跡に及んでいたものと思われる。

文治2年(1186年 鎌倉時代初期)、東大寺再興を

これらをまとめると、

尾上山||隠岡||隠山||常明寺のある山||あか井
尾上寺||泉寺||天福寺||常明寺

と成ると思われる、この解説では、同意異語と思われる語彙が錯綜していて、混乱していると思われる。

凶会中の記述解説

金毘羅

金刀比羅神社ことひらじんじやの意。主祭神は大物主神で、海運業者や商人によつて信仰が厚かった。金毘羅は儀軌ぎぎに記載されている尊名の中から選ばれた二十八部衆の一神である。

應徳毘多神 薩和羅神

二十八部衆の二神である。

その他、本堂天井に吉田兼好の落書きあり、等らう、稻荷、古社、天あま(不明)の記述あり。

祈祷するため、同寺(常明寺)の僧60人を引き連れ大神宮に参詣した。俊乗坊重源は常明寺で外宮法樂供養(大般若経を転読)をしている。

建久4年(1193年)、東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記いせの大神宮によると、参詣時の大般若経二部は常明寺に安置されたという。その時代には既に、かなり大きな寺院となつていたと思われる。

鎌倉末期(1330年頃)に成立した高庫藏等秘抄たかくらざうひみつにはすでに尾部御陵の記事が見られ、所引の岩屋本縁いわやほんには、妙見星童形像を得て、尾部御陵以西の小田岡崎宮の靈地に居え奉り、氏人の繁栄を祈るいのちとある。小田岡崎宮が尾上町にある妙見堂であることから、その東にあたるに尾部御陵(常明寺の岩窟)があり、倭姫命の墓と周知されている存在になつていたがわかる。所在地の隠岡かくがもこの石隠れの伝承によつている。

江戸時代初期(1603年以降)の神風小名寄かみかぜのななぞ、天

神宮神道或問』などでは倭姫御陵として見える。

寛永年中(1624〜44年)に常明寺はもと真言宗であつたが天台宗に改宗している。

寛文年間(1661〜73年)、常明寺住職 祐海法師や累代神宮大宮司中の名宮司といわれた、大宮司で朝臣の河辺精長(生没 慶長6〜貞享5年1601〜1688年)やその顧問官で外宮権禰宜の出口延佳(生没 元和1〜元禄3年1615〜1690年)らが常明寺の岩窟を「尾部御陵」、即ち、倭姫命の陵墓だと特に主張し始めた。(外宮派の学者は尾上峰説を主張した)。他の説は庄倒され、明治時代まで影響して、前述の御巫氏も自説を翻せざるを得なくなつたと考えられる。

元治2年(1865年)、御巫氏は、尾部御陵は常明寺の岩窟だと主張して、内密書を両神宮に発送して回答を要求している。

伊勢参宮名所図会(寛政9年(1797年)京都・大阪の版元から刊行)には、常明寺図会が掲載。

江戸時代に3回、尾部御陵は古墳として発掘されている。明治22年以前(Ⅱ江戸時代)の発掘では、銅環・鈴・須恵器(有蓋高坏・提瓶・横瓶・麴)・金環・銀環、金銅製の鈴が出土したという。出土遺物からすると、6世紀中頃から後半にあたる。

明治元年(1868年)、常明寺は廃仏毀釈のため廃寺となり、堂舎は破却され、寺宝等は散逸している。常明寺門前町と呼ばれていた町名を仏教地名を廃し、倭姫命に由来して「倭町」と変更した。

明治22年(1889年)の御巫清直の『尾部御陵紀原』によれば、尾部御陵は、

横穴式で、石室を有する高さ1.8m、東西6m・南北1.2mほどの古墳であるが、墳形不明で、江戸時代には前方後円とする説もあつた。

明治23年(1890年)第4回尾上町虎尾山古墳群発掘。倭姫命の尾上山墓の可能性が指摘された。

明治31年(1898年)第5回尾上町虎尾山古墳群発掘。『尾部御陵起源』によれば、明治年間の発掘では、銅環・鈴・須恵器などが出土したという。

明治37年(1904年)7月、伊勢新聞に、倭姫命陵墓調査に在東京帝国大学古蹟調査会の中山憲信、高橋二三雄氏が来田(宇治山田)調査」と報じられている。

明治40年(1907年)10月、今回、宮内省で御陵墓を制定することになり、諸陵頭山口氏等は来勢し、倭町金比羅境内の古墳を詳細に調査。これを鑑定するので近日御陵墓の工事に着手という。

同年、神苑会が御幸道路造成に着工(同43年に竣工)。その時、常明寺中央を貫く切通しが造成されたものと考えられる。切通しで分断される前のこの場所は一体の丘陵地で、古市から下った坂道は現、浄明寺(旧淨久寺、あるいは旧東本願寺)の先で西側

へ左折し、一与坊墓地を左手に見ながら北の二見街道に抜ける西の坂しかなかった。

明治42年(1909年)に大北亀太郎などの地元有志の運動により、との記述もあるが、松木時彦著『続神都百物語続編』(昭和7年発行)85尾部御陵には、同年4月13日、三重県告示第151号において、宇治山田市大字倭町共有山林内の古墳、元常明寺山は(倭姫)陵墓伝説地として宮内省において保存せらるゝとあり、また、伊勢市史考古編P.11によると、同年に倭町常明寺境内に所在した尾部古墳が「宇治山田墓」(倭姫命墓参考地)として治定され、現在に至っている、とある。

大正5年(1916年)頃、第6回尾上町虎尾山古墳群発掘。遺物が出土している。

大正10年(1921年)実測図によれば墳丘は方形で横穴式石室が南方向に開口した(現在は非開口)。昭和3年(1928年)10月、宮内省により埋葬地と伝

えられる古墳が倭姫の陵墓参考地に治定され、現在は宮内庁により管理されている、との記述が、瑞垣令和5年初夏号(255)「倭姫宮の御鎮座について」(神宮宮掌 小川倫太郎)やフリー百科事典ウィキペディアにもみられるが、明治42年との差異は解らない。

平成24年版伊勢市史考古編391ページ、251「尾部古墳」による発掘調査結果は、次のように記述されている。

常明寺の発掘調査結果と伊勢参宮名所図会の境内図と照合すると、江戸時代の境内は市道東側に存在するものと思われる。現在の金毘羅神社の位置が本堂のあつた位置か。付近に近世瓦が散布する。発掘調査で確認された南面する総柱式掘立柱建物は常明寺名初見の時期と一致し、平安時代の常明寺の遺構と考えて問題はない。北東側にさらに大きな

総柱式掘立柱建物の存在が想定でき、その多くは明治以降に削平されたものと考えられる。なお現在、台地東側の谷間に「日蓮上人誓いの井」と呼ばれる井戸があるが、これは常明寺の「閼加井あかゐ」(法会に用いる聖水の井戸)である、との報告が見られる。

考察

伊勢参宮名所図会「常明寺」の建物の配置を現在の地図に当てはめてみると次のようになり、その位置と記述を対比してみる。

図会の挿絵の、常明寺庫裏の配置と比較すると、合致していないのは、

- 尾部社は泉寺(＝常明寺)の西にあり。
- 岩窟は(常明寺)山門の西の端にある。
- 妙見堂は尾上陵より西にあった。

- 尾部社は(古市)街道の左、妙見堂の東にあり。
- 神萱落社は尾上寺(本堂)の前にあり。
- 神萱落社は常明寺の西にあり。

○阿か井は庫裏の東。竹林の内にあり。

○現在、倭姫命陵墓参考地の古墳の位置。合致していない記述もあるが、時代の違いによる建物の形状が異なってきたと理解すると、今回の作図は、寛政9年(1797年)伊勢参宮名所図会作成時の常明寺の配置と比較して、大きな疑問を抱くことはないように考えるか？

平成24年版伊勢市史考古編391ページ、251「尾部古墳」の報告は、発掘調査を行っているので、その内容に疑義はないと思われるが、俄に納得し難い疑問点もある。疑問点とその内容については次の通り。

○江戸時代の境内は市道東側に存在する。

御幸道路は県道22号線であるので、市道とはどれか？「誉坊墓地東の道ならば疑問はない。現在の金毘羅神社の位置が本堂のあつた位置。私案も近い位置にある。

- 南面する総柱式掘立柱建物
建物が本堂であれば疑問ない。
- 北東側にさらに大きな総柱式掘立柱建物あり。
どこの北東側か？本堂北東側だとしたら、そこには谷があつたのでないか？
- 台地東側の谷間に「日蓮上人誓いの井」と呼ばれる井戸は、これは常明寺の「閼加井あかゐ」である。
現在の「日蓮上人誓いの井」は前述の地獄谷の底にある。しかし、伊勢参宮名所図会「常明寺版画の阿か井」は寺と同じ平面か、傾斜地で本堂より南にあるので、それを同一視するには困難があるように考える。従って、常明寺本堂が位置する地形は、明治以降に削平されたの



は、切通しだけでその他の常明寺山形は現状と大きく変容していないように考えるが？

また、「闕加井」の字は伊勢参宮名所図会²では阿(用)構えに加(井)の字になっている。

宇治山田市史において、前述、松木時彦は次のように語っている。

倭姫の神都薨去説に賛同はするけれど、高庫蔵等秘抄(俗にいう、岩屋本縁)¹にみる尾部御陵を真の倭姫命の御陵だと信じる訳にはいかない。

この石窟は諸国に散在する皇族の御陵に比べて規模が小さく、倭姫命の功績から考えて、倭姫命の御陵だとは考え難い。

しからは誰の御陵かと言うと、度会神主二門の祖である神主飛鳥ではないかと思う。常明寺の前身はこの陵の守りの宿舎であつて、継体天皇の御代の創建だと言われているので、飛鳥は丁度、その頃の祀官であり、宮

本村大字藤里に属する丸山と言う所にいた田上大水神社は度会神主四門の祖であった小事(飛鳥の弟)を祀っているが、その墳墓と構造等が似ているからである。

また、「二所太神尾部御陵図」(御巫清直 尾部御陵紀原)(天神宮叢書 大神宮神事考證)、斎宮記³、元弘2年(1332年)頃成立の詔刀師沙汰文⁴によると、6世紀中頃から後半という時期の欽明朝(539〜570年)に大神主小事(度会氏)の娘で斎王の代理として内親王を称していた宮子がおおり、宮子の墓とも考えられるともいう。

神話の話が故にまだまだ疑問は尽きない。

倭姫宮

倭姫宮の創建に関して、寛政9年(1797年)発行の伊勢参宮名所図会^二には、次の記述がある。

尾部社おのべのやしろ

(古市)街道より左(北)、妙見堂の東にあった。祭神ははつきりしないが、倭姫命なのだろう。神祇本源^一によると、泉寺の西にあったというが泉寺が廃寺になつて長いのでわからない。ある説によると泉寺は常明寺の一名で、つまり、倭姫命の石隠れの地であるので、小さな祠ほこらがあり、それを尾部の社といった(倭姫命の祠)。

つまり、妙見堂の北東にあつて、倭姫命の石隠れの地である泉寺、つまり常明寺の西にある小さな祠が尾部社、つまり倭姫命の祠であるとしている。

倭姫宮の創建の歴史については、各資料に差異があり、混乱しているように思われるが、時系列的に整理してみると次のごとくになるかも知れない。

瑞垣 令和5年初夏号(255) 倭姫宮の御鎮座について^一(神宮宮掌 小川倫太郎)には、尾上社は江戸時代初期には一時的に廃絶したようであるが、後に再興され、明治時代に岩淵町に鎮座する箕曲中松原のなまほら神社に合祀されていた、という。

明治元年(1868年)、常明寺は廃仏毀釈のため廃寺となり、堂舎は破却され寺宝等は散逸した。

町名 常明寺門前町^二は仏教地名を避け、倭姫命に由来して「倭町」と変更した

明治20年(1887年)頃より宇治山田町の住民を中心に、倭姫命を祀る神社を創立すべきという声が高まった。

明治26年(1893年)5月 『伊勢新聞』の記事、

明治37年(1904年)12月、神宮奉斎会本部内に倭姫命の祠があり、例祭^三が行われていたと思われる。

明治39年(1906年)宇治山田市は市制が施行。

明治40年(1907年)6月 宇治今在家町の倭姫神社は神宮所管社だが、御成街道線路に当るので内宮神苑大山祇神社境内に移転する予定^四との記事があるので、倭姫神社は内宮周辺にあつたか？

宇治山田市の将来構想計画である市是を策定する会議は、明治41年〜大正2年の5年間にわたり断続的に設置された。日露戦後経営・地方改良運動という全国的な動きとも連動した、市制施行後の都市像を議論する初めての試みであり、そのことを評価しなくてはならないだろう。しかし実現に向けて動き出したのは、伝染病院の建設や宮川分水事業、倭姫宮の創立などごくわずかであったことも事実である。

宇治山田町では来る明治29年は皇太神宮遷宮1900年に相当するので、同町有志者は同年大祭典を挙行する計画。また、佐伯順氏は同時に倭姫命の神祠を造営することを主唱し、主意書を印刷配布しているなど^五その後の流れは全く不明、とある。

明治27〜8年(1894〜5年)の頃、神宮宮司鹿島則文が、多気郡斎宮村(現在の明和町)の斎宮寮旧趾に神宮の別宮として倭姫命を奉祀しようと当時の政府に要望したが果たせなかった。

明治29年(1896年)、皇太神宮遷宮1900年。

明治34年(1901年)3月、神宮大宮司伯爵冷泉為紀らがその志を継いで請願したが果たせなかった。

明治35年(1902年)より神宮奉斎会本部が定期的に「倭姫命の祭典を奉仕」することになった。

前述、倭姫宮の御鎮座について^二によると、同年、神宮大宮司冷泉為紀が、倭姫命奉斎の別宮創立を内務大臣に請願した、という。

大正に入り神宮司庁と地元宇治山田市から倭姫命を祭る神社を創建する運動が生じた。

大正元年（1912年）宇治山田町は市長が先頭に立ち倭姫命を祀る神社の創立許可を国会に請願。

大正4年（1915年）、大正天皇即位御大礼催行。

同年2月、宇治山田市市長福地由廉が市会の決議を以て、奉仕の議を宮内大臣男爵波多野尊直、内務大臣子爵大浦兼武の両大臣に請願するに及んで、民衆の声として当局を動かすことができた。

同年4月、倭姫命奉祀期成会が組織され、市長福地市長が期成会長に推薦された。（市）役所内に事務所を設置し、副会長、理事、評議員を嘱託して、地方の世論を喚起すると共に、衆議院議員、天春文衛、尾崎行雄、浜田国松らが提出者となつて、同議員岡崎邦輔ら120余名の賛成を得て、倭姫命奉祀に関する建議」を5月、衆議院の提出した。これについて、天春は大要を説明し、6月、委員会、本会議とも

し裁可された、という。

大正10年（1921年）1月4日、内務省告示第1号として、内宮別宮として倭姫宮の創立が決定。

宮名：倭姫宮、祭神：倭姫命、宮号宣下年月：大正10年1月、鎮座地：度会郡四郷村大字楠部、城内反別3町5反6畝2歩。

倭姫命宮の宮地については、前述の斎宮寮旧趾などの候補があつたけれども、丘を隔てた近くに倭姫命の陵墓があり、徴古館などが立地する倉田山の地が選ばれた。伊勢参宮名所図会」に、尾部社」は妙見堂の東にあつた」という記述も関係していないだろうか。

大正11年（1922年）3月31日、地鎮祭ほか造営諸祭を催行。11月5日、倭姫宮は内宮と外宮の間である倉田山に鎮座した。

大正12年（1923年）

9月1日、関東大震災により10月7日が延期され、

に満場一致で可決された。

大正5年（1916年）8月、市は五二会ホテル跡地（虎尾山）を買収して倭姫命奉祀敷地あるいは御用邸敷地に転用する計画を立て市会に提案したが否決、妥協案が成立した。

大正8年（1919年）1月、別宮創建に関する計画調査を神宮司庁に示し、帝国議会で創立の予算が可決された。

前述、倭姫宮の御鎮座について」によると、内務省神政局長より、別宮創設内定の通達があり、神宮では調査結果を2月に答申した、という。

大正9年（1920年）8月、内務省は同年の追加予算として神宮別宮創建費総額、金406、658円を計上し、4ヶ年継続事業とすることを帝国議会に諮り可決された。

前述、倭姫宮の御鎮座について」によると、12月、皇大神宮別宮として倭姫命奉祀のことについて上奏

11月5日、御鎮座祭。

11月6日、奉幣の儀。鎮座を報告する臨時祭。

12月、隣接する倉田山に内宮別宮の倭姫宮が創建され、倭姫命が祀られた。

伊勢神宮を構成する神社としては唯一、近代以降の創立である。

昭和4年（1929年）、第58回式年遷宮。

倭姫命宮は新しい故に式年遷宮の対象外となった。

昭和11年（1936年）9月1日、宇治山田市は1906明治39年に市制が施行されて以来30周年を迎えたこの日、早朝から両宮ならびに倭姫宮に参拝する市民の列は引きも切らなかつたという。

昭和20年（1945年）2月15日に宇治山田空襲があり、付近で焼夷弾による火災が発生。

7月29日、宿衛屋が焼失したが本殿は無事だった。

昭和22年（1947年）、前述 倭姫宮の御鎮座につい

て」によると、金刀比羅神社が箕曲中松原神社より分祀され、旧社地(倭町)に復祀された時、尾上社も分祀され、金刀比羅神社に合祀された、という。

〔尾上社は倭姫命の祠ではないのか？ 神萱落社の間違いか？〕

昭和24年(1947年)、倭姫宮崇敬奉賛団体 御杖代講」が発足。御鎮座日11月5日に礼典催行。

昭和28年(1953年)、第59回式年遷宮で、倭姫命宮は初めて遷宮された。

昭和29年(1954年)11月5日、遷御の儀。

昭和52年(1954年) 御杖代講」が 倭姫宮御杖奉

賛会」と改称。6月5日も礼典催行。

令和5年(2023年)、倭姫宮鎮座100周年。

倭姫宮御杖奉賛会」が中心となって、奉祝行事が行われる。現在に至る。

おわりに

集めた史料はいろいろな錯誤が入り混じり、神代の時代のことがはっきりしないのは当然ながら、近代のことも断片を継ぎ接ぎしているような史料が多く、はっきり把握できなかった。現在も神代の時代が続いているのかも知れないが、倭姫宮創建100周年に当たり、倭姫命」のことをしっかりと正確に伝える 現代版倭姫命世記」が必要だと感じた次第である。

(完)

謝 辞

〓指導頂きました伊勢市情報戦略局文化政策課

山本翔麻様に深く御礼申し上げます。

参考文献

宇治山田市史 復刻版 昭和47年 三宅書店

伊勢市史 平成24年 伊勢市

伊勢参宮名所図会

瑞垣 令和5年初夏号(255) 倭姫宮の御鎮座につ

いて「神宮宮掌 小川倫太郎

フリー百科事典ウィキペディアほかホームページ